

腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第七十八弾

神社本庁再生への道―その四十一

評議員会を私物化し、鷹司総理に刃を向けた

田中執行部の悲しき末路―神道関係者は議論を重ね、令和の新時代を切り拓け

国防について、国会で徹底的に議論せよ！

藤原登（フリーライター）

中国による台湾進攻の可能性など、緊迫する東アジア情勢をめぐり、我が国の安全保障のあり方が問われている。その背景には、台湾有事は日本の有事だとして、日米同盟を基軸とする

防衛費の大幅な増額を含む安全保障体制の整備を、岸田政権が進めようとしていることがあ

る。このようなきま臭い状況意識して、少し前にタレントのタモリが口にした「新しい戦前」という言葉が話題になった。筆者も同感するところはあるが、国際化時代なのだから、「新しい戦中」の方が相応しいと思う。

現実には、ウクライナやガザ地区では、はげしい戦争状態が継続し、停戦への途が見えない。そして日本を含む多くの国が、武器供与や経済支援、あるいは経

済制裁を通して、これらの紛争に関与している現実があるから。そして、油断していると日本もウクライナのようになるとして、前記した防衛力の整備が進められてゆく、という流れである。しかし、同盟関係や武器調達などは議論されても、一国の安全保障の前提にあるべき、「自

分の国は自分で守る」という独立国家ならば当然の議論は、ほとんど聞かえてこない。筆者には、三島由紀夫烈士が市ヶ谷台の上で残した言葉が、重くのしかかる。

日本の現実を直視していた三島氏は、愛する自衛隊に対し、「諸君に与えられる任務は、悲しいかな、最終的には日本からは来ないのだ」「魂の死んだ巨大な武器庫になって、どこへ行かうとするのか」と訴えた。ま

本題へ移る。先月の二十三、二十四日の二日間、神社本庁で評議員会が開催された。まだ、断片的な情報しか入手していないが、結論としては今回も、執行部と一体になった北山秀彦議

長が、鷹司総理による総長指名を尊重せよとの緊急動議に対し、議長は権限を乱用して採決させないまま強行採決したという、常軌を逸した議事運営がなされたようだ。もはや執行部は、百六十名の評議員の中では田中派が少数派であることを自覚している故に、採決だけはさせるなど議長に含んでいたのだから、議会は軽蔑も甚だしい。

さらに議事の中で、複数の田中派評議員や荒井総務部長が、鷹司総理批判を公然と行ったという。総理に歯向かい、評議員会を軽蔑する姿勢は、国に置き換えれば、皇室の権威を貶め、国会運営を混乱させることと同義である。今時、共産党さえそんなことほしめない。ちなみに帝国議会は、明治二十二年発布の帝国憲法によって開設されたが、その起源を辿れば、征韓論に敗れた板垣退助らが、明治七年に民選議院設立の建白書を左院に提出したことに始まる。今年はそのから、奇しくも百五十年目である。その間、日本は敗戦による帝国憲法の改廃という屈辱を味わったが、帝国議会の歩みを振り返れば、議会の公正かつ自由闊達な論戦こそ、国運の源泉になるのだという意識が、議場に漲っていたこ

とが理解できる。もちろん、婦人参政権は戦後まで認められず、普通選挙も大正十四年まで俵たねばならなかった。さらに言うなら、敗戦へと至る戦争の遂行に対して、帝国議会は結果的に無力であった。それでも当時の代議士が、今日以上に選良としての自覚を持ち、議場に臨んでいたことを伺わせる事例には事欠かない。そして今日においても、議長が議会でなく政府の意向を受けて、恣意的な議事運営をすることなど、全く考えられない。もし、そんなことが行われれば、間違いなく懲罰委員会にかけられ、議員を除名されるであろう。

しかし、同じ議事であるはずの神社本庁の評議員会においては、田中体制下において、常軌を逸した議事運営が平然と行われ続けている。それが特に顕著になったのが、二年前に現在の北山議長が就任してからである。評議員の各位には、何れにしろ田中執行部は崩壊間際のだからと、議長も含めた不正追及の手を緩めないでいたことが、あらゆる方法を駆使して、最後まで正論を主張し、公正な議事運営を求め続けてほしい。それが途絶えてしまえば、議会は死んだも同然となり、後世への大きな汚点となるからだ。

神社本庁評議員の果たす役割 毎年六月三十日と大晦日には、各地の神社で大祓という神道行事が執り行われる。そこで唱えられる祝詞の冒頭に、「八百万神等（やおよろずのかみたち）を神集（かむつじ）へに集り賜ひ」という言葉が出てくる。これは神代においても、高天原に神々の代表が集まり、重要案件についての論議がなされていたことを物語る。

現在の神社本庁評議員は、神社の神職と総代の中から選出されているようだが、時代により形式こそ違っても、神道界では会議や議論を大切にしてきたことが伺える。神社という日本の歴史とともにあり、皇室とも関係の深い信仰を伝える組織が、議論を大切にしていることは、尊いことと思う。

令和に入ってから神社本庁のための議論が展開されることを期待している。

藤原登（ふじわらのぼる）

昭和二八年、東京に生まれる。広告代理店勤務の傍ら、歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。